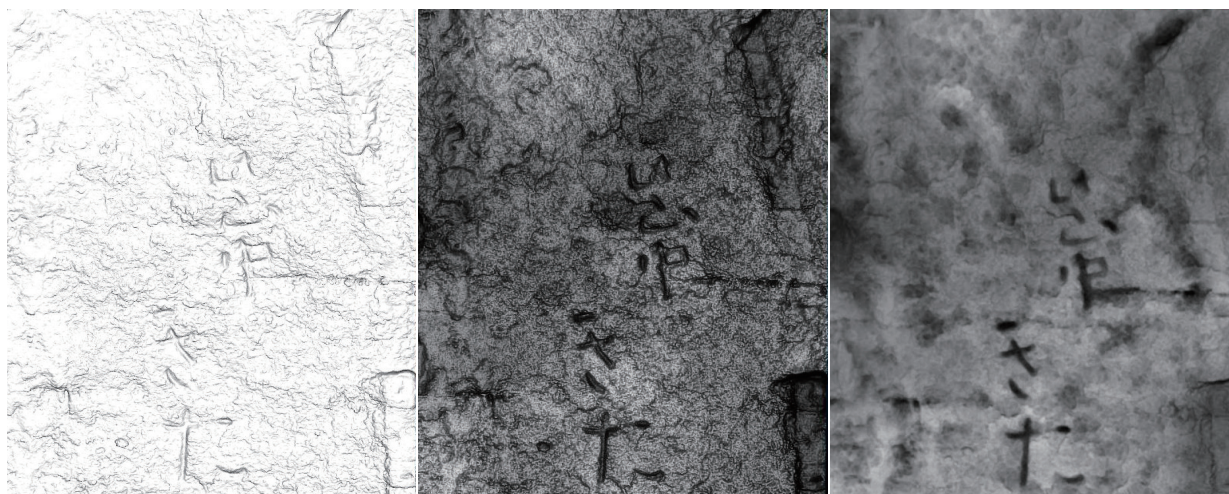




生成した 3D データ

EDL による処理結果

SSAOshader による処理結果

第 4 図 文字刻印の 3D モデル

力し、3次元点群データ処理ソフトの CloudCompare で処理した。CloudCompare では、EDL（第 4 図中）および SSAO shader（第 4 図右）を使用した。その結果、「此山中 きた」と明確に読み取れた。文字の意味することは今後の石材分布状況等も含めて検討が必要である。

（高田）

VI. 複数の矢穴痕が残る種石（No. 4）

県指定史跡小瀬原丁場（No. 1～3）の西約 200 m、重岩の南約 175 m の地点において矢穴痕のある大型石材（No. 4）を発見した。史跡指定地の所在する尾根の南斜面で、周辺は谷地形となっており、石材の南には砂防ダムが存在する。

石材の平面形状は五角形で、東西約 5 m、南北約 5 m、高さ約 4.4 m を測る。本稿では石材の上部を上面、周囲の側面を北から時計回りに A～E 面と呼称する。

上面には石材中央部に南北方向の矢穴列が 2 列（西：矢穴列 1、東：矢穴列 2）見られる。矢穴列 1 は東側が 1 段高くなるような位置に彫られており、特に北半部分は矢穴を彫るのに先立ちノミで矢穴の東側を削っている。矢穴は幅 12～13 cm×厚さ 6 cm×深さ 13 cm 程度である。北端の矢穴は周囲が破損しており、そのためか矢穴を彫るのを途中放棄している。矢穴列 2 は



写真 8 矢穴列（No. 4）



写真 9 矢穴列（No. 16）

幅 12 ～ 13 cm × 厚さ 7 cm × 深さ 11 cm 程度の矢穴で構成される。矢穴列 2 に直交するように石材の北西部に東西方向の矢穴列 3 が見られる。矢穴は幅 11 cm × 厚さ 6 cm × 深さ 13 cm 程度であるが、西端と 2 番目の矢穴間が広く、矢穴一つ分が彫られていないと考えられる。さらに上面から C 面と E 面側に矢穴を彫り石材を割ったこともうかがえる。

次に、側面であるが、A 面と B 面は全体に自然面が残っており、加工等はなされていない。

C 面については上面からの矢穴（矢穴列 4）により石材を割っているが、石材が垂直に割れず、円弧状に割れている。その円弧状に割れた部分を再度上部から矢穴（矢穴列 5）を彫り割っているが、それもまた円弧状に割れている。矢穴列 4・5 はいずれも幅 11 cm、深さ 15 cm 程度の矢穴である。矢穴列 4・5 で割った後に、上面から続く矢穴列 3 が彫られている。また、同様に矢穴列 5 で割った後に側面から水平に矢穴（矢穴列 6）を彫っており、幅 11 cm × 厚さ 7 cm × 深さ 13 cm 程度の矢穴で構成される。しかし、矢穴列は中央部で上下にずれが生じている。なお、矢穴列 6 の下部は自然面を残している。

D 面側は右側に自然面を残し、矢穴列 6 の続きの矢穴が 3 個見られる。左側は割肌ではあるが、矢穴は見られない。

E 面については上面からの矢穴（矢穴列 7）により石材を割っているが、矢穴列 4・5 同様に、垂直には割れなかったものとみられ、石材の中段右半で再度上部から矢穴を彫り（矢穴列 8）、石材を割っている。矢穴列 7・8 とも幅 11 ～ 12 cm、深さ 13 cm 程度の築で構成される。

石材の割り方の前後関係から、矢穴列 4 → 矢穴列 5 → 矢穴列 6 及び矢穴列 3 と、矢穴列 7 → 矢穴列 8 の状況がうかがえる。矢穴列 1・2 とそれ以外の矢穴列との前後関係は不明であるが、矢穴列 3 と直交する矢穴列 2 が関係性を持つものと考えられる。このことからまず、矢穴列 4



第 5 図 No. 4, 5, 16, 17 のオルソ画像 (S=1/100)

及び矢穴列7で余分な石材を除こうとしたがうまく割れず、矢穴列5・8でさらに調整を図ったものと考えられる。矢穴列1は矢穴を彫る際に石材が破損し途中放棄されていることから、最終的には矢穴列2・3・6で採石を試みたと考えるが、矢穴列3で矢穴1個が彫られていないことや、矢穴列6の矢穴列にずれが生じたことなどから、うまく採石できず放棄されたものと考えられる。

石材No.4の西側には、埋もれており全容は不明であるが、長径約3.7m×短径約3.1mの楕円形の石材（No.16）が見られ、石材中央に南北方向の矢穴列が見られる。矢穴は幅14cm×厚さ6cm×深さ14cm程度である。

さらに石材No.16の南西側にも幅11～12cm×深さ9cmの矢穴が見られる石材（No.17）、No.4の南側にも13cm×深さ13cmの矢穴が見られる石材（No.5）などが点在する。

しかし、周辺には豆矢で割った石材や、ルートハンマー痕の残る石材のほか、石材の木っ端等が散乱しており、さらに谷地形のかなり上部まで重機が通ったような道の痕跡もあり、かなり新しい時代まで採石が行われていたことがうかがえる。近世において周辺地で採石を行っていた可能性は高いが、こうした近代の採石によってほぼ採石当初の姿は失われていると考えられる。

（大嶋）

VII. SNS等を活用したオープンな情報発信

地域の文化財は、地域住民の資産である。学術的な調査は、専門家に依存せざるを得ないが、その成果はすべて地域に還元されるものであって、学術分野と地域が分断されることは好ましくない。そのため、一般的には調査事業の終わりにシンポジウム等によって、還元を図られることが多い。一方、小豆島石丁場調査委員会では、調査の際、リアルタイムで成果発信していくこととなった。その理由はいくつかある。①現在は、SNS等によって無償でリアルタイムな発信が容易であること、②調査は可能な範囲で地域住民参画型であるが、当日の成果に関して、一般参加者に守秘義務を課すことは現実的ではないこと、むしろ積極的にSNS発信してもらった方がより周知が進むこと、③石丁場は山にあり、存在の継承が難しい。たくさんの方に知ってもらうことこそ文化財の継承に資すること、等である。調査当日の成果を評価し位置づけをしていくには、一定の時間が必要であるため、それらは、刊行物としてまとめていく予定である。

それぞれ発信する情報形式によって、次のサービスを開設した。たくさんの方に成果を知ってもらえることを願っている。

（高田）

参考文献

徳島文理大学編 2019『東瀬戸内海島嶼部における大坂城築城石丁場と石材輸送水運に関する研究』平成26～30年度科学

研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書

土庄町誌編集委員会編 1971『土庄町誌』、土庄町誌編集委員会

橋詰茂 2021「小豆島における未確認石丁場の所在」『徳島文理大学比較文化研究所年報』第37号